

光明禪寺

第 497号

令和六年二月

現在に活ける
仙の教え

大丈夫。素敵でないと、自信が持
てるようになる。

二月の行事

一開運・星祭やくそく法要

節分三日午前10時・風二時・夜七時30分

半間ひま惜しんで客を失い、半
間ひまを惜しんで信用を失い、半
間ひまを惜しんで友人を失う。

明日を生きよう、昨日を忘れろ。

桃、栗、三年、柿八年。
石の上にも三年だ、我慢だよ！

一釋迦如来涅槃会法要

十五日 二時

電話 221-4127
(2回線)
ケイタイ 090-7981-9123
FAX 241-3519

(県市文化財指定安置所)
〒651-0402 指宿市十町南迎田二七六八

一庄懸命一所懸命一緒懸命
仲間と一緒にがんばろう。

一地蔵尊・水子供養會
二十四日 二時

節分ってなあに

春、夏、秋、冬の四季の交わり日を
節分というのです。今では二月の初
めごうの冬から春への交わりめの
立春の前の日を節分というようにな
りました。冬から春へと新しい季節
を迎えるにあたっては、悪い鬼や悪い
病気が家の中に入らぬように豆
をまいて、悪い鬼や魔物を追い払
う行事を昔から行つてきたのです。
今でも「節分」には、「鬼は外 福は内」
と、大声を出して豆をまくのは、その
ためなのです。人间のこころの中には
よことを考えたり行つたりするこ
ともありますか、その反対に、なま
けたいといふところ、少しでも樂をして
たいというところ、人をうやんたり
り、ねたんでりするところもあるの

です。このような悪いこころや、
なまけこころを自分のこころの中
から追ひ払つて幸せをめざすた
めに、節分では豆をまくのです。
自分のこころの中の悪い鬼を追いつ
出して、清らかなこころを持ちへ
びけるようにしてしましよう。「鬼は外
福は内」と、大きな声で、つてみまし
ょ。鬼は、障子紙を舌でなめて、
穴を開けて家の中とのぞいたのです。
その鬼の目をめがけて「鬼は外、鬼の
めん玉ぶつぶせ」といり豆をなげま
した。いり豆は、芽がでないからです。
めん玉ぶつぶせは、目をつきさせて見えな
いからです。人间は自分の生活を
鬼から見られるのがこわかったのです
ね。

節分には、どうして豆をまくの
節分というのは、昔のこよみでは冬と
春のさかり日のことで、寒い冬が終りと
わって暖かい春がやってくる前の夜のことなるのです。昔は、この節分の夜には鬼がやつてくると信じられていたのです。たれても寒い冬より、暖かい春のほうが好きでしょ
う。暖かく、草花も芽を出し、サクラも咲く春を、昔の人も今の人も待つて、ます。この待ちに待つた春をお迎えしての前の夜に、あの鬼が家にやってきたら、みんなはどうしますか。いやでしょう。追はばうつてしまひた、気持ちにならでしょ
う。昔の人は鬼たちは「りり豆」は芽がないので、いちばんきらいなも

のと思つていたので、鬼のくるといわれて、いる節分の夜に「りり豆」とさけられて、「福は内、鬼は外」とさけんで、鬼が家の中に入らないようになんて、鬼が家の中に入らぬように祈つたのです。場所によつては「福は内、福は内」とかさけばない地方もありまづ、これは「鬼は外」とさけぶと、鬼がおこうて戻つてきてしまふのをさけるための工夫で、農家の人にとつては豆は大切です。農家の人にとつては豆は大切です。必ず、かう、その豆に幸福を招く願いをこめたのをさうい角をもつた赤鬼や青鬼が家にやつてきたり、みんなはどうしますか。いやでしょう。追はばうくるしまざるものはない

遠仁者疎道と
じんとをきものはむちにうなし

不苦者有智
くるしまざるものはない

なむとうぬんじょうほんみょうがんじん
南無当年星本命元辰

なむごんやうかうあくせいたせん
南無善星皆来悪星退散

とうして鬼は角がはえているの

なまけごこうやがこるごこう、おろ
かなごこうがあると、その人は鬼のよう
な人です。どんなときでも、なまけはい
おこらない、おろかなごこうを起こさ
ないで、世のため人のためになることに努
める人は鬼ではなく人間です。人間は
せのため人のためにつくして、みんなに助
けうれ正在ることを知つて、近所の人
や友だちと仲よくくらすものなのです。
角つき合わせて、いがみ合つたりはしま
りのです。だから人間にには、角はあり
ません。鬼は、なまけごこうやがこるこ

ころ、おろかなごこうだけしかもつていな
いで、めすみをしたり、けんかをしたり、
人と戦つたり、あうそつたりしているの
で、いつも、いうこうしているので頭に
角が出てくるのです。人間も、いうこう
一たり、おこったり、あうそつたりし
ている人の顔を見ると、角が見えま
すね。お友だちと仲よく、みんなのた
めになることをしてやえば、鬼のよう
に角は生えませんよ。人間のやさしい鬼
りやりの前には、鬼だっておとなしくなって
しまうし、人間よりやさしい鬼だって
にちがいありません。

仏の道は おかけさまと
生きれる 道であり
ありがとうと生きぬく
道であります